



西籍概論

二

文学

16

61

□ 13

3082

2



18
3882
2

西籍概論講本二之卷



叔殷乃末世三十一代目れ王々名多辛と云ふ是か
謂以爲紂王にり是又夏の桀王う如くじんハムて
何く此と暴虐川事有きて此時小西伯名ハ昌
と申せり有て是り彼いを小周文王てムこれ終
紂王れ三公中女毛勒免居はし追々紂小背い
了諸候字懐けて下に付てム此者甚多の野智
了男て紂王々惡行を幸として己せりハへと取繕
つて身人死々し人の面向くやうと其行ひ成勉

免いりて其時崇候虎や云者り紂王に告て申
す小に西伯積善累德諸侯皆嚮之將不利於帝と申
白る故に紂王に尤に聞入て西伯子美里と云處へ
囚へて之を囚へて西伯に囚はるは乃内々彼伏羲氏
よりおしらへては八卦へ象辭や云多作つて添たて
て其を史記より朱熹乃通鑑易の本義より夏高
之末易道中微文王拘於羑里而繫象辭易道復興と
ありり此も孔子の作つて云十翼に易之興也其
於中古子作易者其有憂患乎といひはる易之興也
其當殷之末世周之盛德邪當文王與紂之事邪と

申してある共思ひ合はる宜しいては此で文王の
易へ繫はる辭とも趣意はと云ふと云ふ已り君
殷紂王の悪行ある隙を伺て國を奪はうと云ふ乃
奸智より思付て伏羲氏に八卦を彼國へ早くと
り傳へて人の信をばよの故夫へ附會して其い
ひ成やうは君とあはれ人も不徳なものは徳ある者其
君を代はても苦しからぬや落て来はやくに取成
し又世の常へは臣やして君と亡きとを義も及ま
なると天命の歸しとる時を苦しからぬ様にも
てはけらと言ふし其は一般の湯王の桀王の放

出て國と奪はさの實ハ天理に叶つていと
云ふ意ないひ落し扱已まもさう為んとの下心て
ムさる占はて驗の有と後立にして是人作ふあら
も自然乃天地の道と世の人を欺は後に已り
及逆せむ時乃罪多天命不託てれられ覆ふへ天地
盤としてあらかし世人にををし道にもつてム
は周易六十四卦の中にも澤火革の卦の辞は文
王ことに心と大宛おる物と見へはくム夫ゆへ此
卦の象辞傳ふも革云く天地革而四時成易武革命
順乎天而應乎人革之時大矣哉と有杯ら則易と作

つらる本意て君として不徳ふも有徳なる人
出て國と奪ても苦しうらも是則天心也とやうに
偽り字構へるものてム殊に損益の卦ハ紂子伐つ
年不當はさもめて其象辞に利有攸往利涉大川と
大けらへ其子り時に至つて紂子らへて亥年ぬ決
断せしむる未來記小作はるものてムことと依て
武王ら果して此二卦成りてさる庚寅の年に孟津
といふ大川に渉り殷の都へ攻入はて其君王を弑
しててム孔子が雷水解の象辞と評してさる語は作
易者其知字といつぬれ易乃作者の本意は

く見ぬ心はさう語ては猶くさくさの祥瑞とつふも
うはへて殷亡び周興るへ此命期乃由とけし外
はる曆法ともけり改定易と律と成証會して始
めて長年數の喜誕とらはへるの未來記は此とめ
張本此設とふし子思ひしは此る其事多神小とて
民に信多とらせんやしもけあやう是らの事ハ
別尔委しん申もして中を以て一席二席に去はけ
くされは事てはふいては斯く殷紂王ハ西伯子美
里に庫に拘へたけりと百日ハかりもいふしたる
所ハ西伯の臣に大顛閔天敬宜生自と云ふも乃共

か計は免々らしき義女名馬其外撞くの免はらし
き物取取れりへて紂王不献して其罪は贖はさば
所々紂王ハ女好乃事故心不おも甚た悦んで麗し
麗女計りても西伯の罪は釋せに足る事多まして
りる色々物多奉る事有や赦はくらんや云て悦
ひの余りに弓矢斧鉞とあさへ征伐と心のほくふ
せよと云ていぬしめては爰に紂王ハ好ひるは
所ては扱西伯ハいりけれて國に歸てはけり我
惡事多紂王に告ふる崇侯虎城りち亡不しけり益
く上へとりけりて人字ふは希或は兵字又は者侯

子化やし形くもして國といろ久きてふんれの本
書亦明年伐犬戎明年伐密須明年敗蕃國明年伐邦
明年伐崇候虎西伯歸乃陰修德行善諸候多叛紂而
往歸西伯々々滋大紂由是稍失權重と有は通てて
ふ叔其砌り呂尚と古者々有て是ハ元紂王小事爲
女め者て何つぬかとの用ひられけり事を憤り世
と乃かれて甚く困窮にふらし年老し七十余りふ
れとも謀畧のそふれさる男なる少才諸候亦遊説
して見よれとも心のあふ者も形くろ乃中に西伯
ろ殷の王位を奪ふんとすふ下心をそふれとて夫

ふけりて事わらさし免れも其尾にけいふ也
亦出んとせり心てそまて形く西伯に出くわせ謀
略に語てやり入て用ひらまんと下たふてて渭
水と云ふ河の邊に巢と法ほにこくとせて西伯々
獵ふ出候に待て居てふ則本書に以渙釣軒周西
伯と有はむふのとてふ爰に西伯ハ獵ふ出んとし
卜てハしむる慶々今日の獲るハ虎てもむく羅
ともなく必ず玉とふの輔得らまほせうと云
ふからるるふんふ獵ふいほりもそとして渭水の
河邊に只者とハミへぬ老人々餘念もむくつと

と思へるさうてよく真言日蓮などの賊法師共は
するやうなふりもあるてふ夫の思ひ合もへたと
乃多うる中にうら丁候と女ふり周にしさうは
る時に太公望へ則丁候の形と畫れて其の頭と目
と腹と股と足とに箭に射付けて呪詛事なすかの
丁候は甚しく煩悩を出してゐてそこで使と遣はし
て臣と家子仕へはかとうとやと去てやると丁候
ハとうも苦しんで此らぬらいらいりふも仰ぐ徒ひ
はせう云ふて太公望ハ甲乙の日に其頭に射
つに置るは矢をぬれ丙丁の日に八月に射付けて

了失とぬれ戊己の日ハ其腹の矢はぬき庚辛の
日ハ股の矢はぬき壬癸の日ハ其足の矢はぬ
くと丁候の病ハ則愈むてふや太公望の諸候共
はちなるを徒に依事あるは則本書の頭書に
此事と記する史記の増注したる光緒の文人乃評
に據之太公祇一妖魔怪誕之術耳安ん信哉太史公
凡曰陰謀陰權等字俱非太公本色や去つてハ理
ふたとして如何も是らハ謀畧ふと云やうな立
派な事なはれい真言法師や日蓮宗乃賊法師等の
や謂ふる呪ひ又魔法なと云と同じ事てふ猶思

ひあもす一記惡工のハ論衡と云書了太公陰謀食
小兒以丹令身純赤長大殺言殷亡殷民見兒身赤以
為天伸及言殷亡皆謂商滅兵至牧野晨舉指燭其謀
惑民權掩不備周之所諱也とある猶此外にも韓
非子に文王資費仲而遊於紂之傍令之間紂而乱其
心と云ひ又周有王叔紂令膠鬲索之文王不予費仲
未求因予之是膠鬲賢而費仲無道也周惡賢者之得
志也故吊費仲と云ともあるかとらふ様々惡と
云ふ事行ふて時の至るは後述の者てふと北ハ淮
南子ハ文王為玉門築靈臺以待紂之失と有る代も

思ひ合せて事て俗の儒者もとりくくやうの
と云ハ猫のそくが隠をやりふれしうくしてよれ
ははるとりるしいひおれらと聖人くとと云て毛
てそやを其下心ういやらしいてふ○叔右の如く
乃惡多をミ多して周とひろむめ處と見て紂王の
臣尔祖尹ヤ云者西伯かしわ内子にくみやうて禍
ういたらん事多懼れて紂王ハ身之行ひ以慎む色
記をし河諫むとも云々益々又んそくとやる
所々ありはは紂王ハ親族に微子比干箕子ふと
去ふ忠臣有て輔佐してたさうら西伯ハ形不未た

うれ革命の時のいたらぬ事を知て忠くしげにも
てふしうけつて見合せ字法あてふ論語亦此事と
不えて三分天下有其二以服事於殷周之徳可謂至
徳而已と孔子の申しはここの山へてふ但し孔子乃
此語と讚岐の大華と云人の評して論語ハ實小孔
子の善教と記しあめ書云也か此語ハ大不經なる
語云やと云はてや乃評に天下者殷之天下也西伯
者臣也雖尺土莫非殷之地雖一民莫非殷之人周之
初者岐山之下而已而至有其二者蠶食而有之は
王上に在はせぬハ王乃地亦王の地と蠶食をる

ハ叛に非をして何ぞ史記に西伯呂尚と圖て諸侯
の傾倚の趣ありこれを以て是とみよハ奇謀を以
て諸侯を臣としよると明ふて何と以て其不臣と
以て至徳と稱するや此語勢を分るに既に其二
有は時を設て服事屯へうらそ然色共ふ不服事を
ほとの謂は李譬へ全ふ天下と有はとも其君亦服
事をへからははれ理何らんハ我邦の君臣ハ義成
主とて彼國ハ地主とて其隔ぬ事殊遠かてとい
はぬは是は盡く尤れ論てふ然れとも孔子のハ
西伯に譽するには記もなす其記といふハ孔子

周の世に生れよふ人故しハらム時世ホトシ
てやうにいれよ物て是ハ本意てハむいり夫ホ
ホても是ハいハすまもか語て例乃つくし深
孔子に取しハついの口をもつたのてもあ
ら論ハ大華云へる如くハくけ故これらハ孔子
ハ語ても取きてすへて事てムさる字俗儒者共
ふんとい一向ホぢホらの目もしはれかねてム
らムて西伯ハ時節に至らぬ字見合せたうら
年老て死んぬてムホの死ぬる今ハの時に
姫發ホ申にも見善勿怠時至勿疑や遺言い
白して

死んぬてムこの遺言と上ホ引ぬる易の辞と
考へ合すかろしいてム扱ホの姫發とホふハ
ハハる周ハ武王ホ事て此者父西伯ホ志
太公望と師として軒術と學ひ身姫且と云
心と合せて紂王ハハは成何つて字了所
更ハ心つらホの惡行猶止ぬら乃兄ホ
子ハ諫をあくんで父子乃道を骨肉の事
過あれも子三たハこれと諫て聴けり時
過ありやれ三ハひさめて死んぬさ
過ありやれ三ハひさめて死んぬさ

事しやとてほし其職とせたくはらず又彼箕子は亦
れ紂王の親戚てもあり是彼と理と盡してい内
む所かまわぬやとて或人をも免てとも悪行
ハやむと多はははら去るかよいと云ふと記
は箕子云ふにハ人の臣や成てハさめと云ふま
をて去るのハハれ君の悪は彰とる理とゆへ昔
はさうハ得せぬと云はてハやと狂氣の極にして
髪と被り多あふれて奴やなりかくれて琴ひひ
多一人悲て居ると紂王ハハれと囚へたてハ又ハ
乃比干ハこれも紂王の親戚てハらでハ忠義の

ふりき者ハハ君ハハやハちあらずも死以て
争ふ者或もの云やと云て直言を發して死びしハ
諫欠と名時に紂王ハ怒て吾々ハ聖人の心ハハ七
の竅あると云事云やかみやうと云て其比干ハ殺
し心を割て視てハ様の子云人くと云ハハ夫ハ
と云ハハ扱て死神のと云はいておるといハ者ハ
しかとのふハハのふハ差又周武王と云ハ乃如ハ
紂王乃悪行の益く甚えれ子待りくひつてハ
の父西伯ハ遺言に時至て疑ハ事ハハれと云ハハ
のハハ通て更ハ疑ハハ兵子ハハ免て殷有重罪不

可以不伐と云ひふも自ら専らふせぬと云ふの心
く父西伯の木主に載せ王号を稱して文王となし
吾も太子殺し稱し自ら四萬五十人に將として誓
詞を立て諸侯共小紂王を惡行以て殺せし
予を維行天之罰勉哉所不勉爾身自戮ふと多し
て殷乃都を打入る時小伯夷叔齊と云ふ兄弟二人
ら有てこれをもと孤竹と云國の子ふる其父の
死ぬめ時に後の継ハ弟の叔齊と定めて死んで
所ら死後亦叔齊ハ兄の伯夷に譲ふふとも伯夷
ハ父命也と云て國をのりしと叔齊も又兄乃

有るに我立へばしてハふいと云はて遁去さから
ぞこて國人をてれ中子に立ると云ふに此兄弟
ハ皆れころ西伯と云人子にけふる以て實に
と人ヤ心得て投化したし多る所ハ右の如
く叛逆と云ふ事ハ思ひの外にとりて武王
り馬を叩て諫て去ふには父死不葬及干弋可謂
孝子以臣弑君可謂仁乎と云はる處ハ武王ハ左
右の者共既亦殺ゆんと云はる時に彼太公望ハ云ふ
には是ハ義人しに依て殺も事ふる是と云はて
扶て去らし免ふ事ハ此の二人ハ猶未に出

るる至つてと死入てム○斯て殷に紂王も武王も
攻来ると聞兵士七十萬人以發して戦はる所り
とても死神けついでたは事故一戦小打負て走
及て鹿臺と去臺へ登て自ら火中に飛入て燔死し
よてム時に武王も紂王も燔死しよ處不至つて
自ら弓矢射る事三多にけりて車より下りて劍と拔て
是字撃ち黄越と以多紂王も頭を斬大白虎旗に懸
け又彼姐已と今一人は愛妾を經れて死たる多も
右の如く其頭を小白の旗と云に懸けけせよ時
ふりの微子へ降参に出よてム叔られ箕子が囚れ

て居よと釋し又諫を入殺ほれよ此干り基を封
し紂王も子の武庚禄父と云者に封し殷の先祖の
祀を續しめ諸候とあしたか共其叛かんと事以恐
れ我弟の管叔鮮蔡叔度と去者と添て殷乃舊都に
治よとせ爰に於てれ乃は自ら王を南て功臣と封
し弟一に太公望を齊と去大國に封し弟の周公且
多ハ魯と去小國に封し其外とも夫も小功に賞し
故周公且らと相計て已か叛逆の罪と覆ひ隠し又
向後へ人尔奪はるよしを為小彼文王が美里に於
て作て置は易に天道天命と彌るのへ弘也、皮尚

書小見一あり種々乃文と作て其託言を致した物
て公實に文王武王周公且ら遠征慮の深きと古今
並小者はあらずいて公殷の世継ぎとふと三十代
五百八年て此亡ひはふ年が紂王の五十二年庚寅
乃年て公奥に彼伯夷叔齊ハ武王ヲ既小殷の紂王
と亡して自立致し國中乃諸侯共々夫と王とし尊
小成にて是を耻りしく思ひ周の粟を食ふはいと
首陽山と云ふ山に隠れて始めハ蕨を掘て食てい
ふ人思へはかく周の代と有ればハ國中此物何に
よら屯周の物しや不依て夫小生白は物し食ふハ

死事てはふいと心と云へ免て食を絶ちずて小死
せんともめ時に歌以作つとて公其歌不登彼西山
兮采其薇矣以暴易暴不知其非矣神農虞夏忽焉没
兮我安適歸矣于嗟祖兮命之衰矣と歌ふて逐々首
陽山に餓死せよて公實小我人にして奇特な人
て孔子もいよく稱て古の賢人なりとも仁と求
て仁成得たりとも又不降其志不辱其身伯夷叔齊
子とも不食て死して公又吾師翁れおれ兩人の像
とりけり繪れ賛に「こやけへくから國人の死を
かけさふはしは今けら論ふへくもあらもそか

中に伯夷叔齊と云ひけん人の武王の軍を留めし
ハ少ゆり君と臣との区別は字にもむあたりに
似ぬりきとと首陽の山にして飯にうへてははか
れりくとと名乃神乃御靈やうふらさしけむか
しホキやいつこの國にしても我り天に神ろ死乃
大御教へぬあふはしうを自ららる心とふと
形は毛ものごとくはやと春のさハラハのとら
ぬる天の日けとも忽出にに季とあははれか
かにえさる事てふはたもつたし人乃評ふハまは
唐の韓退子が伯夷の頌と云ふ士之特立獨行適於

義而已不顧人之是非皆豪傑之士信道篤而自知名
者也一家非之力行而不惑者寡矣至於一國一州非
之力行而不惑者蓋天下一人而已矣至若舉世非之
力行而不惑者則千百全乃一人而已耳若伯夷者窮
天地且萬世而不顧者也云々當殷之亡周之興云々
武王周公聖人也率天下之賢士與天下之諸侯而往
攻之未嘗聞有非之者也彼伯夷叔齊者乃獨以為不
可殷既滅矣天下宗周彼二子者獨耻食其粟餓死而
不顧繇是而言夫豈有求而為哉信道篤而月知明者
也今世之所謂士者一凡人譽之則自以為有余一凡

人沮之則自以為不足彼獨非聖人自是如此云々今
故曰若伯夷者特立獨行窮天地亘萬世而不顧者也
又朱子評孟子曰聖人百世之師也伯夷是也故聞
伯夷之風者頑夫廉懦夫有立志奮守百世之上百世
之下聞者莫不興起也夫孟子之於伯夷其論之詳也
或以為聖止清云々此論乃以百世之師歸之而孔子
及不與焉何哉孔子道大德中而無迹故學之者沒身
讚仰而不足伯夷志潔行高而迹著故慕之者一日感
慨而有餘也然則伯夷之功不為小也云々云へ了並小
たししり或評てム小け余に王直り伯夷十辨云々

去ふともし免々さく論うあるけととも大抵武
王の主殺しの罪とや牙をるし小せんとも作さば
説ともにて云ふ小も思らやそれと御國の儒者小
もけ了事にして伯夷は非やしつ了へ物部徂徠伊
藤東涯南やしやかもろこし人へ已外國の聖人と
もの事しやお依てし々云者もあてやう事しや
之れ漢人すら右の朱子韓退子らかやつ小いへは
もある所多皇國乃儒者ともやういふ非心得り
氣味乃いほ小輩て事不當にたむらハ武王しへ
とて毛やる氣とみへは云々〇扱武王し紂王多亡

して後二年月尔年九十三歳て死んで其子誦と云
か十二て代て王と成さふ成王と云ふは是うと
てふこれ不味けて王かほさる周の武王とし九十
三にしてとほかてし時七の子の成王いは女十三
歳れりと記せり然れ成王は武王より八十一の時
の子尔てやあてけは古つ人ハ云々徒かてし事ハ
論かけ共猶いろにやや覺ゆる事此王早く子
共あはた有つまハ子孫とあひ乃危ふも有るに
ふ得生せよほへほるいミしれ老のほても猶好
色心のやほはりしふりけり聖人と云ふ者もはる

もれふやありけん」と記しよかれましまかひりに
もさほてて此成王より次にも子ハ形好有てふ又武
王の父の女王も免つさう年のとめはて子は生さ
毛れて左傳に管蔡邴霍魯衛毛聃部曹滕畢原酆郇
文之昭也やあつららふれ十六箇國の君に封しあ
るはみふ文王より子てふの上ふ武王と今一人伯邑
考云けて武王より兄もあはれよから十八人あつに
ましてこれ等男子計多あやによしてはる女子も
十人と十五人と有あらし又か多も有あらしふ
らら丈夫ふ四五十人の子持てあつてふり色々

又大愛ふとく男と云ふも乃ハ若ひ女ふさへ合へ
ハ隨合七十八十に立けても子を生ぜるもの女ハ
ら文王も妾と云ふといひてかやうに生しぬ乃て
是も亦もあはへき事ぬ父王ハ妻の大姫と云は
た為婆くあけちりらぬとのてムなせと云
ふ武王ハ殷と七しさるぞのとに弟とも子と
ふ國くに封しさる中ハ康叔封と云ふと再季載
といふ同母乃身ハ有て是ハいふハ少く國に封
せられなんのとあはち此時武王を九十一歳の時
てムはをさハと乃二人ハ身ハやうに十四五で

あつとみへはあくらら年數ハムにてみたり
の大姫といふハ百餘歳と上と云ふし白る時の子
てム女ハ百有餘歳に成つてもはさ子ハ生出と
ハとんとあつらし此婆くあはちやうの事も人
ハうはかりと見すこしてとるハ氣ハつれて書を
むとこんハ免けらしれとも見出たものてム彼
上雜姐形とに色くかやう乃免けはし此事ハ人部
といふ所に記しあは免てあはち是ハ心流らふ
ん多事も見へぬム俗乃學者ハとらム聖人ト云
へは聞たちして佛者ハ佛ハ思ふやうに心得てた

了慥分女も好むものてム〇扱この成王も世も成
てと彼幼弱の事少く周公且へ已り封じられしは
魯國に入府ハせんて自ら王の席ハ居て成王と
輔佐し多し政事専らにして既に其位ハ篡むと
し多る事わねかぬも篡ひはうおも見へたとふ
事多彼燕の呂公奭太公望をしく彼紂王も子の武
康に附といふる管叔蔡叔其外の兄弟とも周公且
多疑ふる彼是と流言を多る中にも大乃管叔蔡叔
ハ周公且り罪多とへんとしてりの紂王も子の武
庚と扱て乱と作してム大わへかやうあはつれり

けり管叔蔡叔乃二人か自力で周公且も勝た
あふハぬ事と知て多るゆえこ乃武庚ハ取て立て
事多計らへは殷としこ小者共も多かつて徒よと
と考へまた武庚も父紂王も仇と報ひて思はて
も是も當時はうんなる周公ハ敵しうた死事少へ
管叔蔡叔も此催し成幸ひに同心して思ひ立ても
のてム爰尔於て周公且も軍を興して大詰りあ向
ふ其兄管叔蔡叔とかの武庚も殺し蔡叔とハ北ひ
を以てて武庚も所領ハ二に尔もけ未だ弟康叔と
女多衛と云國ハ封し彼紂王も兄の微子も宋と去

國小立て殷の祠を継ぐは是二年計也
はて其邊で字ひとゆつ寧ろ多や去事てムこれ尔
にけてハ羅人より蘇軾かのハハハ東坡より武
王に論しつる文の中に此事も去て武王非聖人也
昔者孔子蓋罪湯武顧自以為殷之子孫而周人也故
不散然數致意焉云々伯夷叙齊之於武王也蓋謂之
弑君至耻之不食其粟而孔子予之其罪武王也甚矣
此孔子之家法也云々而孟軻始乱之曰吾聞武王誅
獨夫紂未聞弑君也自是學者以湯武為聖人之正若
當然者皆孔子之罪人也云々殺其父封其子其子非

人也則可使其子而果人也則必死之云々武王親以
黃鉞斬紂使武庚受封而不叛豈復人也哉故武庚之
必叛不待智者而後知也武王之封武庚蓋亦不得已
焉耳殷有天下六百年云々紂雖無道其故家遺俗未
盡滅也三今天下有其二殷不伐周而周伐之誅其君
夷其社稷諸侯必有不悅者故封武庚以慰之此豈武
王之意哉故曰武王非聖人也云々いほしむり是は
さう去得たは論て甚多と毛し乃い實小東坡か此
文にいつと了如く武王より紂王と亡しつるは非
として従ハぬ國も多人有るてムとれ成王

さて然れども其仇を誅すべき手立てもかた
乃儘にといふは是れ後益々乱まらばしむ代々
不謀及人も絶て四方の夷狄といやし免る國々か
らハ攻られたる彼是あけし死間も五人舟て殺し
昭王うら七代目の厲王も女小王を國人不叛り
礼て出奔せり此厲王うら三代めの幽王と云ふ王
も彼誰も知てぬ了麋婣と云ふ美女は寵愛も所
かこ乃女々とんと笑へぬ女てあはれぬ幽王ハ是
と笑へせんと欲して十計萬方をれども笑ハぬ處
ろと此頃國々乱れては故に寇のせ先至は事屢

あは其時を國々の軍兵に知らせん為る烽火以擧
ると麋婣はそれを見てハ笑ふて云て云て云王ハ
麋婣ら笑いとみたゞらるやは寇は未ぬ時ても烽
火多らるる其時ハ國々の軍兵ハ寇乃来ると思
はて云る来るとはと寇も何も未ぬらむなしと
かへるむやりの事うまへく可憐なりしハ後ハ
ハ國々乃軍兵も合点し事の治しと上ても来ぬく
なはして云ね此麋婣ら生んぬる子多次尔立んと
してその本書と廢し其の生んぬる太子れも廢
し、為所が鼠の申候と云か怒て西に方犬戎と云

夷狄かたといて幽王をせ失て、此時幽王ハ例
の烽火をあげて軍兵を催涎たたくことまで度々
こぼれきて、故今度の軍兵一人も至らぬ彼
川柳魚下、つらひこつて、ハないと幽王の事と
云はるる如く、此時亦や、褒姒を笑ひをよほしこ
て、ハあつちして、さハくちあふ幽王ハ殺はれ、
幽王ハ武王まで幽王に至て二百五十七年にして、周ハ
幽王に亡び、幽王ハ太子宣白と云ふ立て王とあ
候とも相談し、幽王ハ太子宣白と云ふ立て王とあ
は、是字平王と云て、今よての都く亡はれぬる

故東の方雒邑を去り、地に遷して、是よて、以来の世
を、ハ東周と云ふて、此東周の平王を去り、代り
ハ勢ひ益々衰微して、所れとも、死々如く諸侯し
ハ小輩ハ勢ひ強んたも、儘に傍の小國とも、死
て、徒々つらんと、もして、一向に周の下知、聞もの
なく、周乃領地も段々へ、ア、ア、立て、来り、其内、平王
より、十二代目の悼王と云ふ王ハ、其弟子朝といふ
不殺は、と、悼王ハ、五人目の哀王と云ふ王を
其弟、叔襲と云ふ乃、殺して、其位を奪つて、
是と思王と云ふ所り、位不、は、いて、五月を、不、い、

ち未の弟小嵬やいふり有て其兄思王を殺して位
字奪ふ是に考王と云ては是より後ハ領地もゆる
く食て生ていふと云くらいにへつて見たりも
毛ふらり諸候共々いし欠つけらるゝてハ則通
鑑ふも其土地人民不足以比強國之大夫と云ふ又
帝王世記云者に、雖居天子之位号為諸侯所役
逼與家人無量やも云てある不とのとてハ皆色て
もなまゝく續ひて以て平王から二十二人め
赧王と云ふ時小秦や小國からせ免られてるの
有て了地とれたらす獻て降参おむしおくて周ハ

祢こてけ七かて祠もあへてしははて秦代と云
ふにちつとてハ漢人揚慎と云ふ者の言に周三十
七王八百六十五年然自武王滅殷至迷王二百五十
七年而昭王之時王道已微懿王之時王道遂衰昭王
南巡不及厲王死干壘蓋此二百五十七年之内變故
多矣東遷以後不足言也治日之少如此と云つゝ
通史の事てハ俗乃儒者ともれんと夏殷周乃三代
といひ中ふも周世々々や云し寢ても起てもう
けく戀しうるハハの代乃事しやう實ハ五七年と
やすららに多さまはあてや致さぬてハ○扱

孔子ハこれ東周ハ代れ未レ方靈王と云王々二十
 一年と云年子生れ多レ人多先祖を設紂王々兄乃
 微子ハ封せられ多レ宋と云國乃血脉の人て父
 の名成叔梁紇といひ母成ハ顔子と云叔梁紇の
 年老了はて男子の多き事と云レ成尼丘山と云
 山の神を待て右の顔子と野合して生ん多レ子
 てム生れて首上に竊むめ所り有て尼丘山の形し
 てあつ多レゆへ名を丘と云ひ字を仲尼と付多し
 女としてムと乃生れ多レ魯の國の昌平郷の陬
 邑と云所てム有て此人小兒の時々ら遊ぶ多レも

禮儀以容と志と何おとろく行義よく凡て
く長て十九歳乃時書多むりて子以生んぬ其
時魯の君昭公が所から鯉奠字くれぬゆへと也
うめてふしとて名以鯉字と伯奠とつあてて夫
り子の名を彼と云い字を孔子思と云て中庸成作
つて人てん扱此孔子ハ老子に考からと事有
たふもとも一鯉ハ正しれた人て此人の事と
師翁もから人ふらふしむくも譽て歌ふも聖
人賢人の去へとも聖人のあやひらぬや孔子ハ
と人やけよまきた不との事てん此人生涯の

事多しんん申はハカの論語々昔十有五にして
學に志し三十にして立と云ふ多ける如く十五の
時々て學問に志して三十歳の時其心はしん所
の本意り立と云事ても何色とも貪しく賤しん
世には誰もそふれたる人と云事ハ知てこれや
用ゆる人なくしんらく乃間魯の君小仕へる未
嘗不して用ひられを國くと流浪してもちゆる人
もあらふりと心ふんるはハカり乱る身は國に
こつふ一人乃と死人ゆへとるをて死人ハ他下を
添はるく習ひにて謬言をせに死しては其國くと

さす又諸國の知者共乃所へ行てハ食客小なり
て居るめと毛しハカり此事て余て不用ゆは人り
なれ故ふるん乃事ハ公山不狃と云ふ叛逆人
か用ひらうと云て召ふるふしぬにけへ往ふと致
した程の事多ム其國々れ君ら不用ふぬも理ふる
事は其時分ハカらも別して國から乱るはし
人臣然らしるにす所と孔子ハ國の乱りか
ハしれ字ふとし王と王らしく尊む事酒専らと此
る故諸國の君とも心ふ合ぬとふム其流浪して
あるとちらけくと難義ふいしん中にも

楚と云ふ小國を以てかうと云ふは道に於て陳國と蔡國と云ふ二國の軍兵に、亦は是を糧と絶ち従ふ者共めてもみ甫起けともふらぬ程に腹とへいしと事も有り又或と紀ハ陽虎や女ふとほけりやとみほりへられて彼ハ此奴と孔子字うじろ手ふしりりと云へる如く其しをつりしへらぬりハ知らぬりとりへられ女事林もある又司馬植魃と云ふ者には殺はれんとしる李何か度くから紀目にも逢ふ事と云ふてこの人字ハ聖人々と云はて其聖人と云ふ者儒者かとの云所てハ其心

も行いも尋常の人とい異にして佛者らら佛徒らそさふやうふとれもれら多ハ者の如くいといすうつらく孔子の言行成これハその心も行ひも尋常の人何もハは事あると正しくよこ人と云ふはての事と云やれも先第一に神と恐れ敬いて生ふる人に仕へほ如く少か乃物も初穂といはれ我祖乃靈に於て又十九歳ハ時書成いへ伯夷と云と生し多ふと見れハ礼記に三十ふして娶ると云ふ事ハあれと二十はへ女ふ合ひ又うまふ物の道合にそまるとへて山梁乃雌雉時哉

カ々ときくをうはれさりてと不め又原壤と云
老人のなし得たるともかくて長生をる成ぜの脛
をうつて老て死せよと賊や云ふとやとハむ
れも云ひ又秘藏の弟子の顔淵が死んた時ハ鳴
呼天我々亡はせりふと云はれ去て禮記に
哭きと云い慟せぬと云ひ定まらざれば
餘て尔慟して正氣多失いはれはくを雷鳴り風杯
乃烈しき時もこの方と同じ事おハかたこと
へいろと変してたてろしりまの主教の類を
へて道あるぬ事やる者う有めやいらふ腹立

て諸を礼を討ん杯と關らぬ事おもはし出て願ひ
ふやめ致し又似て非ふもの多惡むや云て似
山とへいりかにくかて其任不當つては既に少正
印杯去ものとの首はへ下打切ててこ此余其言
行と見ると何もせけり行ひぬ人誡も我師翁に
心も行もよふ似る人ては是を過言と思はる
人ハ云く孔子乃書成をみよと吾翁の書讀て其
言行以味ひて惜了かよわては叔世のひか者此為
にハ惡みをしらとて世小入とられかんぬ自共
いりくも世よてらへ人小背くと云やアふと

ふ如事なく夫ても君親乃事子へ其惡さを覆ひ隠
し柱てもを欺み去いほけもを去ると去り本志て
とらもいへぬはミのちるを記して斯て生涯
用ひられぬ事多憤つて小言と云いつけさ何毛
著述とてもせもさ今乃世に傳へる尚書序字正
し詩經の重複多削去て三百篇とふしはぬ已り生
れたる諸越乃國の乱すかハしん定れたる君南て
はに第一之道の大本を立ぬ事多殊れ外尔歎れ御
國の如く道の本たる君の統と定れぬ心の心有
て其時分もぬさ衰へると思け共周の王統を

尊を存成尊んで外をハかと賤しめ口と開けハ
真の道乃心くへと解けし魯國乃記録も春秋
と云ふ字撰定して其事實の上を勸善懲惡の筆意
とあらハしそれハ東周の平王より四十九年まで筆
と起して同じく敬王より三十九年まで二百四十餘
年間乃を言少として義甚多ふりくめては死物
ふり取られて此春秋多ある孔子の心は
牙持事ハ古道の大意を委く申さ通すは記して
かく道とて争ハ事實の上でふうてハ志れを空
論するハ人の心を入る事と支り山へ吾以知は

者ぞきたく春秋かされ字罪をば者ぞれ女く春秋
かとはへ云ひといて是程孔子乃心のくみへは
者ハなをどの生涯れ真心と見るも實に淚のまほ
れぬ事てムはてつふとに心減こめて其心たあら
ハし置いなもやも本とて乱りあつ自然の國々ら
ゆへ小さくも孔子の心を用以ぬ者れくさく用ゆ
る顔れととして孔子たへ譽ふろハしてたのふ
の事てム孟子ク云はる言に孔子春秋れ作はて
乱臣賊子懼らつと云はるれ共是ハ儒者のさへ
はて々さて實ハ一向にたの春秋乃たろくへ字

用ゆ者南の孔子とて後ハ益々乱きてとろく
周ハ右申如く根こけけ亡む其祠も白へて孔子
生涯乃小言骨とりもむいふ終り其後とるもやれ
如く實ハ孔子は惡き國ハ生れくしはけ孫をとつ
あててム叔茅子ハ三千人有白と云ふ事てム斯て
周敬王乃四十一年と云ふ年乃四月に七十三歳て
率ししてム皇國てハ懿徳天皇の御代三十一年小
あははてム叔孔子の子伯夷ハ五十歳て孔子より
先ハ死て其子ハ子思是と九代後乃子壤と云ふ
漢の世に取立ちとて以来連綿としてその家以つ

三十一
夫孔子の廟に仕えてるの神主とふり今に清の代
迄傳つて代々承未小せず衍聖侯と云ふに封せ
られて成るは是全に孔子の誠心か天津神の御心
に叶ふて成るからにてありとくもろこして
ハ孔子乃家也と古の家をいへて又奇なりとに
ハ孔子の廟はほり志のの中へハ蒞ふとの類惡或
尊を生せも又あし虫も住まも鳥も巢と作らる
今以て大社て人の参詣する事いつも絶や又神靈
を現しむはともあはく有て實に此人ハ神に相
違ふいへん○さて右申ふ如く春秋の始先詩經

書經のとも孔子れ正しあるのとて著しふてハ
るん又論語ハ此人生涯の言行と弟子等乃聞覺へ
居る以後に記しは多しも乃て隨分をろし或書
てハ○扱らるも倭も儒者と云ふ或は或者ともハ
皆これ孔子の學の親とし本尊と致し奉て其儒者
とのの中尔諸越のハしはらるにいて御國の儒者
小大方ハ此孔子の本意はよく得たりと思ははる
かふく別して近世に占學と云ふ學風多と云へ出
しは儒者とも殊ふとやうてんをれも次々に云
ひませうか今日ハ其儒者とも殊ふつゝしり

唐虞三代則いもゆゆ二帝三王と云ふ者としの
世の終りの處志やふつて夫と統て評しふり
其古學者流の儒者らる心得ちりひとらるる
まぜう此ハ篤胤ハ先年々の太宰備右衛門号以春
臺と申白了儒者ハ阿らハし白の辨道書と云書
非説を辨しむゆゆ乃一條て夫ハ先辨道書ハ日
本乃今の世多みるに中華の昔に及ぼるといへ
も天下ハ全ク聖人の道にておぼはり候と存し
然るハ天下の人悉く聖人の教へにちつて禽獸
にちいらすモ公ハ上ふ居てその富貴を保ち士大

夫ハ中におて其禄位を安んじ庶民農工商賈ハ下
に居て其家業を樂そ奴婢藏獲鰥寡孤獨の輩逆も
暴虐ハ所ハ天下平均ハ四海無事有るハはつ
く聖人の所業もて候と去て有はるゆつ漢國に
て皇國のいまの御世に如くめてお治りな事
彼國の世く乃歴史と見へさるに太宰ハ中華のし
かし不及ハ此と云はるハ漢國の誰ハ世にさして
云ふ小らと思ふ彼事くしく云ふ堯舜禹湯武ハ
世に事云つと物多然れとも其牽強甚と云は
たは事て何としし波れらる代と以る皇國ハ今乃

免てま御代ふ比へられませうと夫ハハかに
云に先堯舜の代と云へハ君臣上下の差別正し
らハ父ハ慈有る臣ハ節有る皇國ハはにハ
てこれハとんも禽獸乃有は由てハ君臣上下
ハ差別ふしと云ふハハ堯ハ天子也と云ふのり
形から其女と農父の舜に嫁せむも如何と舜も
はと農父の身として天子やある者の二女と書
て安んし居るハ如何ハ是ハ書經ハ堯ハ我其
試哉女干時觀厥刑于二女とあるハ舜ハ入とな
試ハやうとて斯ハ計ハハハ事ハや有と云ハ

腐儒者乃常談ふれ也然もあらも堯ハ何とて
愚なりしと人となると試み了るハ女と嫁せむ
ても其人やふては知もぬとハハ事ハハ強てハ
ハセ祿ハそ乃行状ハ知ぬや去ハハ堯ハ愚人
と論ハ是ハ子聖人なりとて最もハハ者又去
ハハにそや人ハ只一言に依ても其胸中ハ知
と云て又字書ふも聖者聲也聞聲知情故曰聖也
云事もみへぬ了不堯實に聖ならハ一面會もし
らむにハ其人物は直に知れ了答ハ事ハハ幸ハ
て舜ハ位とも禪ハ不也不ころと云ハハ二也宣

しにれ若し無き如く目利違ひて有りぬらく何と
す了徒に王とある者の二女と農父の人とれを
心みん爲に穢してくろく是上下の差別なく
軽忽にあらそして何ぞ又父を慈なくと云ゆへ
堯舜子も傳へもしむ俱に他人に禅を了すといか
然ほふ夫ん天下と重んじて乃事ふと云ふ是も
儒者乃常談なも共しうらは湯武杯もかにとて堯
舜り心不次て臣下とて有徳の者多撰て禅らそ何
ろ不徳かろ子に傳へ了るや是湯武も其子に愛不
溺れて天下をわくくし事不致したるかほもあら

と堯舜の受禪もよく二代にして行通らも師の云
れし如く却て後世小王莽曹操も徒乃起るへ況其
源と開たるにて無用と也堯舜よと見れそ湯武
も子に慈愛ある者と云へし是堯舜の子に慈愛を
与者に非ずして何ぞ殊る堯ハ數代傳はる宗廟の
祀を重しとせり先祖へハ大なる不孝も非ずや又
堯も舜もゆつきたる時に舜も直にうけてハおむん
と見へて堯死して後其子丹朱もゆつきたる
るもし受て居ぬは事ふらく丹朱不讓るへも由ふ
く舜も受ぬ前に堯も死したるハ舜も力に盡して

丹朱も不徳と輔佐て國を保も一き事て公然
人々慕へハとして自王と成ふは逆臣と云る
も當り前と云事て公鳥羽義著曰く堯愚にして舜
ハ奪へば也堯老老してうらくも改改執らせし
ゆ舜舜好計と逞して人々於此衆を引て天下以
奪つるを季禹舜の世多取也しも又同志と云は
こが是ハさも去へ事て公いかに堯ハ愚昧て
有さうと思ハぬくとも少し小賢者を見てハ
猥り不天下河山はうと云ひ又已れ天子とも名
れわふから農夫ハ賢ク愚くと心む為に其女以

嫁せて辱とも思はす然れ共其去へる言ハは
尤らし此言も何とも是等今乃俗にも心大愚小
して其言語以聞て身利口はりに聞山は者も有る
もの也又堯舜の民と云はて渠らり世と堯民共
まても何と尊れ事小云ふ由ふれと其薄情にして
忠實の心なれ事大へ此やう自し孟軻と云ふ者
とハ堯舜以民ハ軒字並へて封をへし形と云へれ
共るもハ國々の諸侯不謀叛を進免歩行し惡者に
て其云る言やもハ勸化僧の方便言と同じけれ
ハ論此もみえらも扱その不實かめ故ハ先堯ハ治

世に深し心孤勞し民を惠ひり余りて天下とし子
小ハ傳へて他人ふりつてふとして憐れとふ事と
聞ゆゆにさむとはる恩を受る君乃子と譬へ惡
人ふもせと捨果て他人々ハ程慈愛有て己
ら々為にハ幸あふ共夫尔付従て君を仰ぐハ推
並て忠信ふ所為に非也やこそ皆恩子知らさ為
者尔て老るはしも心配しあるは其うを時
之悦ひる死てけ後ハ更に其恩と思へる也舜
死後に禹に從へるも同じ事也大猫にも古主とは
慕ひて他家ふていふ好と旨記物を與へても親ゆ

をひるもは古主乃許にのみ歸ひん事と思ふはれ
ハ其民らハ大猫の心尔も考れしに非ずや臣ハ節
ふしとい是ら乃事を去南りみれ人の事々しく去
亮舜の代の民はハ斯乃如くふそハ彼國乃世々の
人情是に准へて思ひ計めへし漢國の人心ハ薄惡
也やと太ふへてをかて又民百姓はかやうに恩を
思ハぬと以てたもへハ書經文といほも專けふ記
じほもみ南空言て有つとたもハとる火し的事は
も事々しく太ひ南をハ彼國の人の癖なとハ必は
り有うてハ聖人乃とと去へハ老婆々阿彌陀と

信也了如く一向小尊く腐儒者こと愚昧ハ至了と
 申すべし此物てム扱又その次に湯武ハ虐賊ふて是
 ハ已去ふ迄も然く人みふありさる事にハ有れや
 し又稀にハ腐儒以云事尤として欺り此居る人も
 有べしれハ今序小辨しませう扱先身一尔憎じへ
 夫ハ彼國神學を主とせり者共り湯武の弑虐以仁
 義乃征伐と云此れし其以強く去てし桀紂以惡
 事々しく云立ちとるれとも是ハふ湯武の惡
 罪と覆もんやての強説てム己れ謂尔一大國の君
 と生きて萬民の上尔立ちのれれ愚ふる生質此

者ハ去しや去小ハあら詠々も桀紂ら如を行跡の
 有はしれ事ハ去ハからを違ふ臣をわ君を殺すハ
 ら見れハ然れと奇怪ら事とも思ハ去ぬてム譬
 ハ桀紂ら所為り群鼠の中に交てて猛き猫の居る
 り如きもので鼠の猫小制せらばくハ自然乃と尔
 し地の天を戴て其位多変せさめり如く物も此
 ぞ猫の心も鼠に喰殺されりとハ思ハぬ筈の事
 也桀紂も其如く本より愚ふる者なれり群鼠乃中
 に湯武と云猫を喰む鼠乃有るやハ思はむに居る
 らうてム此もハ去や桀ら言にも吾天下有つ事

天の日はほかに如し日亡ひふも吾も則亡ひふて
有りと云ふは君と為者れ真心不て實に君臣乃
道に榮る言のとふふる身支物也然るも君臣の道
は天地に則りて立たる物しや杯云ふから祿を
らるるは祿を以て理の至極と云ふし鼠の逐ふ
猫子はあるはし死事の如く強て云いふはうと
るを餘りて僻説を以るは以て然れとも桀紂
か所為に必しも好と云ふてわ是を多く強て湯武
好まやうと云ふ人に愉さうや事て湯武實に
或人ならは殺して國を奪ふははにせむとも外

ふ為方へ何程も有へ死事て然はふ孟軻ふと
聞誅一夫紂矣未聞弑君也ふと云ふはたは
穢らひし甚に稗史説有りはに女ひくろむと
も湯武は弑虐の罪を論ふに殊に彼國の史共伐桀
すに桀王とハは乃み大に悪虐は此と
て了に湯は奸佞者て凡て人の思ひはくへ死事
の限を為て民を以て黨を結ひたりと云ふは
是皆君子古して天下を奪はつての事て其
入湯誓小湯自ら申るは格爾衆庶悉聽朕言非台小
子敢行稱乱有夏多罪天命殛之と云てりの天命

や太ふと小ふてにとり或はゆゑ爾尚輔予一人致
天之罰予其大賚汝無不信朕不食言爾不從誓言予
則勞戮汝罔有攸赦なとく愚民汝多として一致い
たさせつゝ子君と伐滅して國と奪ひ取たのでム
然して後に自ら云ふにハ予恐末世以台為口實々
ら申て後世の誹り成たせむ事仲虺小誥成作らせ
て其罪と陳しけせぬと然と共君と弑しよ事
誰々口實とせむに置はせうと或漢籍に七歳の小
兒り尚書と讀て牧誓々至て其父小問て曰如何そ
臣として君以伐やと申たは處り其父對てて天小

應し人尔頃ふと云ふれハ又問多用命賞於祖不用
命戮於社豈是人に従ふと云ふも乃らしむと云
ふに其父對ふるを誅へをせ去事々有る小兒せら
見解可は者ハ斯以如くてム叔湯王ハかやう尔惡
逆小行はる後ハまの民の吾尔叛かん事と畏れて
其王滅德作威以敷虐于爾萬方百姓爾萬方百姓羅
其凶害弗忍荼毒云々れと申ぬはハみな俗小云ふ
猫ふて聲々々云ふを以て民の心多悦ハせ甚とく
桀王の惡をかそへ君との者ぬ差して罪人黜伏天
命弗憚ふと嘗て其惡虐云々にやうふしてム然と

とも茲に朕未知獲戾上下慄々危懼若將隕于深淵
於と申ふると以て見れども心の中に其惡逆ハ知て
居る事とみへるも又汝に善美事あらむ吾輩
をばし若し我身に罪あり必ゆりて事な
れなとく云ふ又汝らに罪あらハ夫ハ我一入ハ
かたや若しわきにつみあらハふんちらむゆへと
云事ハ有れともしやふとやうハ佞言を以ても民以
懐け己も又人亡はるはし死構つと成し
ぬ物てふとく思ふし天の下の民ハつとる有
れハとて其衆人々の心くハて爲る事ハと終何ぞ

して其君のつと云と云有はせうや其佞言ハ
らむして何て有るんて漢國の聖人賢と云ふハ
ハかやうハ理直事とも事々しく云ひ立て人に
用ひられやうともはハ悉く佞言て全人民を
にやるとして乃計略てムカやうハ謀言と夫も
知ら屯不尤と兼知して居るとムカハ惡賢とや
ふ國俗形ウら又わハ愚鈍なる所も有てこ
は又周武王と父西伯ハ時々して陰徳と行ひ民
子あつけ敷不叛と云諸侯ハ己ハ強ハハ
て打平らる其領地ハ私に奪取り天下を三分し

て其の二はと有はと云程に有るら猶足る事を
知はす士を養ひ太公望と師として野術を學ひ紂
の惡の増長をめとまち西伯死て後終る兵を擧て
諸侯を會し例乃如く天命誅之と云て愚民とも多
或ハたとし或ハ懐け若とハ獨夫受とれくし其は
いに戦てうち破り紂ハ燔死さ所所に至まで矢は
盡ら自ら君の頭をうちたり刺へに紂王々妻共乃
縊と死せるとも切はふりその惡虐なるはは今見
ゆる如き斯して紂ハ國を奪ひ天命と云ひ上帝
と云ふ託言の並へ立て民を欺ははいに王と成ぬ

は物てム斯くて後四五十年の程周に服せと殷の
為る忠義を存して挑みさる國が四十餘國はた
はは是ら乃忠信者とハ頑民と号てかふん者の如
く云ひふしさてム此事に依ても國中擧て紂に叛
れさる小ハ非る事ともはとさへく儒家者流ハハ
かふやも云ハく云へ吾ハ周の代の頑民こと頼も
しけれ或人た乃れと叱て曰く子乃云小説も
皆世人の情を悖て乱れ小湯武が非とす事實
も過論と云へく又憎むし彼國の經典も孔子も
湯武の徳を稱しさる多くと云はれ共誣れさハ

ふし子是を如何とせむは乃云ふ吾ら徒の學ふ
所へ吾古への大道を本とし規矩として學ぶは
幾彼國の經書を知らずにも古は此譬へ孔子の言行
を云へとも大を小取捨あるは勿論の事なり況や
孔子は湯武より惡を覆して其行を善と稱したるは
其本心に非ずそ乃身は倍臣にして武王を已む君
は君より者先祖を祀へず湯武も合せて稱し
ぬるも湯武より殺虐と云時ハ武王より罪を著明けれ
ば不ぞそ此本情に非ずと云故ハ春秋に周魯の惡
事はハ諱て他の諸侯とも乃惡醜とハ根を盡して

高記に露し又同姓を婚せしは昭公にも禮字知
ありと云ひ又父子の爲に隱し子の父を爲に
くせ直に事其中有りと云ふは亦と云思ふへし
ふ不云ハく伯夷叔齊を賢人なりとも仁とも免
て仁を得たりとも云はれハ其伯夷叔齊の言行と
ハ表裏有る湯武の所爲と善ひとハ云まはて公且
表記小みへは孔子の語にも下之事上也雖有庇
民之大德不敢有君民之心仁之厚也と云ふは亦
と云味ふは或事てハ是みる孔子の孔子たぬ所は
して彼の惡居下流訕上者と云ふは爲言の空し

ら内なるも思ふへ死事てん若し強て道ればに
論して湯武字非とき了時ハ子貢ヲ語に非其世者
不生其利沂其君者不履其土と云ふる如く將に乗
て海爾浮ふより外乃事終ふた事てん是孔子乃大
小時務多辨へ大に人に優色多了可てん今乃俗の
庸儒者とも純らと初次孔子と本尊と立てて云ふ
る不に轉てまハれともかゝる為孔子の意に辨へぬ
ハいかは狂心とや和漢ハ湯武と論せり者數家
ありと云つともそふ強て善人にせんをせぬ負
口て小兒ハ欺くら如き浮説小く更ふ云ふにも足

らぬ説共ふはら其中ハ藍田東龜年ハ著せり湯武
論漢士下てハ先ハ申さる東坡ハ武王論乃ほく其
旨字得ぬは説と云へ支物てんはて此克舜禹湯文
武らの修飾致しよは道成二帝三王ハ道ヤも聖人
の道とも云ふて甚しく尊ん事に申せも乞はらに
くらぬ道てんその道と規則として云く相殺し
相奪ふてぞのけさ畜生鳴ふ異なら屯其ハ鳥羽義
著り言に湯武ら道ハ禽獸にひとし禽獸剛さハ
勝ち弱さハ負て従ふり如し湯武ら道を見んと思
ハく今大の群集するは以て見く強て者ハ或者

有ててかの弱も他と侵せハつてた者是と制
り故不群犬か乃はれに伏と然と共其勢ひ予不
傳よるに於し堯舜湯武の道是不同しと申ふに此
説とく當はれて常へ禽獸とひとし人賤し賤し
免さる蒙古韃靼南やよ李攻入て國を奪ひ取り威
勢はるを多為人方ふ事と其頭を低て天子と敬ひ
其禽獸といや走免さば國俗を改められふに國中
け者共二帝三王二聖人乃子孫らもよふはハ頭
の髪を四方に剃て中の之残しうれけし坊主とか
云ふ風躰を変せられて辱しとも思ハとも片

腹いふも甚もたかた事て幾有はせんう孰々味
ひとるに是皆堯舜湯武らり制作しよる道の過
て且へ彼國人乃人情薄惡ふるに故てハ斯ても中
國の中華のと云て尊し腐儒者輩の心を奇怪に
もれハか事てハ扱此王等の事と彼國の書共不
譽て有るを見て狼狽さる人も皆然る事と思ふ様
子より前に云如く大動了非事ふは是を西戎の者
とも世々此王等の為始々さるるを則として相侵
し相殺し相奪ひもすは事故讚るも理わてハ譬へ
ハ盜賊の仲間してハ盗人の惡事成去者なき却

て大ふく盗多せりものよ甚く譽はる如く夫
と盗賊の仲間にて好む北ハとして其外此者とも
同じやうに譽るもの何て有はせり夫字不むる者
ハ必を湯武と申しら賊心あるに相違明にてハ但
し湯武と譽り人の委く云へハ四は五つの差別有
り一つハ未初學の人おて人か不ぬるゆくに同く
好むまハを死人とて聞ゆる故に何乃辨つるか
く不たるも有て一はハ元未愚昧れ生質小て文辞
不誑は北ハをえり一つハ粗々の惡虐と云事ハ惜
れとも一はハ儒者以業とすは者にて其惡字去立

は時ハ己ハ業の害としかゆへ何くハぬ良に多居
ぬも有て又一はハ負各とて今迫れ習氣字改め
事缺ハをいへハ兩國橋邊アルつそのみせ物
をとしてみせり河童乃意にて舟小入てみれハ思
ひの外に兩具の合羽をれと舟に入てとめ事乃
はとら不口惜けれハ出ふるらみしれ河童よと
て出た者如く今更に証りもあら死人乃ぬま
く其惡字愉せとも一向に受ぬら不して居は
有て己れらも湯武と實に河童とを僻心得して見
る所り思ひの外不欺らしたれハ其合羽を了由

ハ人可も聞せてはとらせむと思ふとしや今一
ハ實情に湯武の所為と尤と思ふ者也是こそハ湯
武同意の人や去へば事てハ假令彼國の書等に
先よりやま夫ハ多く例の言のよき文辞れと見
過して其實ハ其行ひの跡に據て彼とらる善惡ハ
定むべしとてハ抑おやう又穢し此或王とも世
此状と皇國れ先ては御世に比へて中華の昔ハ
及るも杯と女ひ或ハ聖人乃道不て治じ候杯と云
そわゝなほ妄言をや皇國にて湯武の道字をハ用
ふとる者ハ三好義賢明智光秀の輩より其用ひと

は者ら乃成行は思ふし誰も人ぞハたもハぬと
てハ又夫とて世字登奉てハ此條義時同恭時足利
高氏ふとの輩ハ有れとも是身我翁れ委く論ひ置
れなれハ爰不も洩しぬ扱天下乃人悉く聖人ハ教
不依て禽獸に陥らすと申に幾何と云ふ狂言て有
はせう先此處とも何國と思ふとかけはくも可畏
此天照大御神の御本國不して其御子と御坐はて
天皇の代く知者や此皇大御國ふは西戎國の魁
首とも教に依て禽獸に陥ひて杯とハ其身皇國
の外に考ふらハまじしもけう云ハくハひも屯へ

純も此御國の内生れて飽まで御國息と蒙り
居ふららくる狂言と放たハ更に人とは思ハ礼
す聖人と云者此教との尊ひて夫一筋小行ハ
りやせりもハ夫六を禽獸小陷溺しよめ物ふ
穴かしこ其道を專と行ひて了ハ北條足利の時代
又三好明智らり所業多し然りと何と天下平均
也と云はよはせうぢ北條足利が時に相侵し相奪
て四海無事ならはふも全々湯武の道行ハも
くゆつて純の手操とす繩の如くゆかめり西戎
國の例字引て皇國乃正しき証議とんとも吾を黒

繩字引とす如く直く正し此皇國の例字以て西土
のよくれば繩と議す為のて其邪正尊卑實にハ
論に及ハらる事てハ抑俗の儒者乃桀紂の二王と
湯武の二賊とを評論とめ所以思ふに丁度皇國は
古へ物部守屋大連の佛法の我國に行てれんや
めと嫌ひて聖徳太子曾我馬子ふとに亡らとす
事と後世乃賊僧共り守屋大連以甚し此惡逆の如
く女ひふし刺へ小崇峻天皇と弑し奉つる馬子
等々ハ却て弑虐の罪字覆して善人と稱し可畏
も天皇公しも御惡虐に坐しはしとる如く申ふし

奉法は杯と同様乃邪説小て甚もく胸惡人實
小いゆくくしと奴らて公朱子乃語に佛法渡つて
り善惡乃名か違てしははさしと云よし、儒者
の説もや、もて善惡邪止ちつて居る、純
はと申には孔子乃教小従て堯舜以道を學ひ候
見天下の事何々ても足らぬ事か候我等ハ只一
向小孔子を信し候へ、聖人の道を、ハて明
な候と申て候、孔子の教に従て堯舜の道と
學ふ時ハ天下のと何ふても思らぬと、南しとハ扱
もく、狭く學者ら南大宰は、わて於漢學者ハ

大低、や、申て居るとし、や、孔子も儒有博學
而不窮と云ふ事も有は物以斯やうに時務に達
せたりと甚も憐む、死と云ふ事と聞ふつ
けても吾翁の儒學ハ學ふは、く、小、さ、な、物
也と云れ、事思ふ當て尤、尊、く、思、ふ、事、と、云
此間も申、文、了、儒、生、俗、士、豈、時、務、を、知、ん、や、時、務、を、知
るハ俊傑に有り、と云へ、ハ尤、ふ、る、事、と、云、は、是
に付て思ひ出、事有、今、と、五、十、年、計、り、以、前
志道軒、云、小、人、有、て、俗、講、と、業、と、し、と、云、り、其、言
行と録、は、風、流、志、道、軒、乃、傳、と、云、も、乃、卷、五、有、て、都

てハ滑稽多記セはら其中又儒道の事に付て面白
れ論不ぬ故に今こく小取出して申はせう其父に
何れに國に至りても君臣父子夫婦兄弟朋友の五
の道もろく事なし人れみにかりさら此蜜蜂の
飛ふに君臣あり鳥乃及哺鳩の三枝ふ父子の禮備
あり雞ハ羽多けりて雌多愛し猫の不遠慮にさり
るも夫婦は道也鼠ハ算盤に乗兄弟あり犬の尾と
ふけて集り鯢屯ハ也ハ海にかははるも皆明友
の道也伊藤先生論語と宇宙第一の書や云々也
右と其論語の中ふはははた時の宣に通ふハ也

事あり沽酒市脯喰ハると云へても越後の塩引周
防乃はし鯖くしハハ煎海鼠乃類と學者もどぶ
へ捨るもふを祭ハ醴よ季外ハ丹酒ハ作はる
先生もろし是唐ハ身池田伊丹と云ふ名物の酒屋
も有く又海に遠紀國ハしは引乃類ハうはい事
字知らず物や猪子食ハ故に其教も又異なり薑と
すて屯も食ふとい云へ共繪のけんハ食ハぬと
あり又日本ハ禮あり井戸で育つハ蛙學者ハ欠け
るに唐具負ハ成て我り生きた日本と東夷と稱し
天照大神ハ吳の太伯下ちりひ終るハと附會の説

と云ひちらし文武の道と表小飾りらんふんらん
の屍多ひけても知行の采子周の外てもかり或つ
て渡りけむハ其時かへして聖人と恨むし誰や
らり制札の多れは見て國の治らけりと知りさ
と云ふり如ら乱て後尔教ハ出未病り有て後尔醫
藥有るりらの風俗ハ日本と違ふて天子らハさわ
者も同然ふて氣ふ入祢へ取かへて天下ん一人の
天下尔非也天下の人の天下也やつらも口と云ひ
ちらして主の天下多むつたくなふらち千萬ある
國ゆへ聖人出て教へぬもの也日本ハ自然尔礼義

と守る國ゆへ聖人出ても太平成かて唐ハ文
化にとらりけりとして國と韃靼ふせし矢ひ此四百余
州けし坊主に成ても自ら大清水人と覺へて鼻
と祢小けて居るやうふ大こしぬけのへらふりや
もふり日本に毛昔より清盛高時々如死惡人有て
も天下にふらふと思ハる日本て天子多夷略に
ふと慮外ふり此三尺の童子もふはつて居ぬ氣に
なると云へ忠義正し其國故ふて夫故ふこそ天子
の天子多る事ハ世界中に並ふ國有し唐乃法ハ皆
惡化ふへならけり共風俗に應して教へささハ却

て害なり然るも近世の先生多し焮て水練を習ふ
やうな經濟の書と作いて俗人を驚かせし片腹痛
まじかり其位に在られハ其政を以て計らんと云聖
人の教へと忘れて聖人の道と説出する相挫取の
ふんやし字へまれて土俵にまをさる如し其外
浮世の口すゝ學者管乃孔より天とのそ火吹竹
乃鉤鐘を鑄るやうな偏見を説出し我身も山は
もううねれにふはやうな尻ハ二三寸かきも出来
合の聖人にふまらるるを北ハ麒麟鳳凰に星いで
けひき物てもいさうなもの自負せる學者も

世に多し聖人の教へ其道に蕩るはれし尻
ハ儒者ハ手も渡れも人成迷へき事多くらつし時
ハ丈に予害有と採と去さる事あり大低充ふる論
共てハ〇扱又純々孔子の道と得たりとて誇れは
事聖學問答ももへある其語に孔子の道吾り
眼に是とぞ事青天ハ白日を懸ぬる如く今も
至るハ毫髪疑も無や或もし只今も孔子ハ
謁して所見と呈露して其是非と正さん不恐ら
ハ孔子も必我多印可也給ハ人自どと甚いり
しく傍若無人に書ちらしはる然れども純々



となりて其著書をも依りて考るに孔子の教と
熟く覺るる男てへ更にふければ是ハ只人の強
に聖人の道ヲ引入んと思ふ故ル斯ク強言を去は
るて若強て純人となりての如く不多も聖人の道
ルが明けた事と云うれば彌く聖人の道ハあま
り道て西土の道の中とるへた所ハ律令官職の
事ヲ修飾しとる類にて皆皇國の道の枝葉ヲ御取
用いふとれは物に何も其上と強ふに及ばぬ
事てハ或人傍より申せしハ我國の制度は律令を
しめ大抵漢法と移しぬるも乃たれし其本不泝て

律令も何より我國のと讀て足らぬ事なり我國は
此學ハ人衆甚迂遠に事なりといふ已去夫ハ普
通の人ハ誰も一と通りはか思事なれと甚しき非
言也先皇國の律令は西土の制に依り立られなほ
如々見ゆるとも我が國上古より御制ともろま
しの國に制や多合せて程を定先らとて了者
ム然る故に彼國亦有法制の條は皇國の御制不
多事共も多有て又相違の事も少むりらす然る
は我國の學讀をとも有へる皇國ハ其學ハ其ハ
有は志も事てハ其故ハ彼國乃其の用たり所ハ皆

此方にうし取て趾ハ用ふく譬へハ白帳ハ如衣
物故乃事て殷の代の制ハ夏の制ハ此て損益し
又る物ハ礼ヤも殷の代に夏乃制成學ハ足とも用
於成ヤううち了もの周の代に殷ハ代の制乃無益
ふるも同じしてム況や漢國ハ我國ハ風俗善惡も
異有ぬ事ハれれと尚更乃事てム孔子も吾徒周と申
ハハ當代乃と學へると云事てム然れ共故礼と温
て新と知はは學問とる者の常ととく旧ハ學ハん
も惡しとハ非ハ礼共其旧ハ之のみ取て新と廢
ハハ漫りふる事てム俗ハ生者知りふハ學者等ハ

時勢時務と辨へてして周禮ハ有りと礼記に見へ
ることなやハ其はく用ひても害ふ礼と云思ふ甚
又非事てムはて又純は孔子乃道ハ孰人悟てふ
男ハ非也ヤ云故は孔子ハ我ハ國ハ尊んで中と
し他國とハ身ハ絶て夷狄と申し吾ハ王公とる者
とハ敬て其惡ハ申はすして其善のこを稱し我ハ
過ら受ても我君乃非多蔽し生涯周室の衰微と歎
て道を行ハん事多願ひふるハ西我國ハ最
も忠心深き人てム然るに純も凡て春秋乃意と云
語結して内外の差別ハ知ハ孔子も天無二日土

無二王と云ひ又為人臣者無外交不敢戴君とも見
へは物故吾々大君の坐しは才に漫りや西戎の
魁首を我々仕へ奉る君たりも尊れも此と稱して
我々古へは賤しめ彼々國と中華と申て我が國を
夷狄と貶し國に忠ありは心ハ露くかきもな
ては孔子も儒懐忠信以待奉とも主忠信とも云ひ
禮記にも忠信禮之本也無本不立共と論語にも
君子ハ務本本立而道生ふと申て聖人以道ふも本
公專と務むへまことと教ふ事ふれ共純々學ハ
其本立を又より國の事を知り事要とせば漢

學の末と乃と執へやふと云ふは漫て尔狂言
と放ちて國躰ハ損をば甚く我國の制度に背或
は事て既に左傳ハ毀則為賊と有ハ純ハ賊
不當と云ふ者ては猶申は禮記ハ入竟而問禁入
國而問俗入門而問諱云教へも有り又孝經不愛
其親而愛他人者謂悖德不敬其親而敬他人者謂之
悖禮とも見へては純自も悖德ハ仁ハ非や聖
學問答にも云ふから我國を疎みて由來は外國
と愛するハ悖德悖禮に非やし何ぞ彼令にはく
ハ惡事とあるとも我が古へは稱我國にしは忠有

るをく務むるを學者の本旨にて孔子の意もり
ふふべし左傳も諱國惡禮也と有は杜預も注に
掩惡揚善義存君親共々へは況や萬國を優れて
尊を御國に生れて此國に住る此國の米を喰ひ
くら恩と戴て恩を知らず食其食者不毀其器蔭其
樹者不折其枝とさへ云ぬるも有る者成純等へ
も斯まで國に不忠はは讐を以て恩に報ゆると
云ふ物小て最も憎むべき事なり孔子も以怨報德
刑戮之民也と申し置へ事て公論の論也

